様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：５８００１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｈ０５６１１・１９Ｋ２０８１７

研究課題名（和文）消滅の危機に瀕した琉球諸語のモダリティ記述に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A fundamental study of linguistic modality in endangered Ryukyuan languages

研究代表者
崎原　正志（Sakihara, Masashi）

沖縄工業高等専門学校・総合科学科・講師

研究者番号：３０８２８６１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　200,000円

研究成果の概要（和文）：沖縄語首里方言における形態論的研究では〈命令〉といえば「命令形」、〈勧誘〉といえば「勧誘形」といった〈文の機能〉と「述語の形式」が一対一の関係で記述されてきた（その〈文の機能〉をモダリティと呼ぶ）。しかし構文論的研究において、〈命令〉の機能は「命令形」だけでなく、「否定質問形式（～しないか）」や「必然形式（～しなければならない）」等、他の多くの述語の形式を用いた文によっても表すことができることを明らかにした。本研究では、沖縄語・宜野湾市宜野湾方言および国頭語・本部町山里方言を対象言語として、モダリティに関する包括的な調査を行い、各対象言語・方言の様々なタイプの文を記述・解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語の包括的なモダリティ研究である宮崎和人ほか（2002）『モダリティ新日本文法選書４』や日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法４モダリティ』を基礎的研究とし、姉妹言語の琉球語に属する沖縄首里方言、宜野湾方言、山里方言のモダリティについて包括的な調査と記述を実施し、琉球語のモダリティ研究の手本を示した。絶滅の危機に瀕した琉球語を普及させるために必要不可欠な文法書や辞典、教科書を作成するための基礎的研究として活用でき、学術的にも社会的にも寄与できる。

研究成果の概要（英文）：In the morphological study of Shuri variety of Okinawan, one-to-one description of <sentence function> and "form of predicate" is common, for example, “imperative form” in <imperative> sentences and “hortative form” in <hortative sentences> (<sentence function> is equivalent to the word 'modality'). However, the syntactic study shows that the function of <imperative> is expressed not only by sentences with “imperative form” but also sentences with other predicate forms such as “negative question" and "obligative" forms. This study describes and explicates various types of sentences of Ginowan variety of Okinawan and Yamazato, Motobu variety of Kunigami, both spoken on Okinawa Island.

研究分野：琉球語学

キーワード：琉球諸語　モダリティ　沖縄語　国頭語　本部町方言　山里方言

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　消滅の危機に瀕した琉球諸語を対象とする文法研究では、各方言全体の記述文法、特に音声・音韻、形態論的な研究が多く、構文論的な研究や記述が詳細には実施されていなかった。特に文全体の機能を示す「モダリティ」に関する記述は少なかった。

(2)　従来の研究における形態論的・構文論的な研究や記述では、非常に簡易的に、文の機能が〈命令〉なら「命令形」を用いた文、〈勧誘〉なら「勧誘形」を用いた文といった〈文の機能〉と「述語の形式」が一対一になるように記述されてきた。

(3)　崎原（2017）では、例えば〈命令〉の機能は「命令形」だけでなく、「否定質問形式（～しないか）」や「必然形式（～しなければならない）」等、他の多くの述語の形式を用いた文によっても表すことができることを明らかにした。

(4) また同じく崎原（2017）で、文のタイプを「叙述・実行・質問」の３つに大別し、さらに〈叙述〉には〈記述・推量・疑い・希求・意志〉の文や様々なタイプの〈評価〉を表す文を、〈実行〉には〈勧誘・命令・依頼・禁止〉を、〈質問〉には〈真偽質問（肯否疑問）・補充質問（疑問詞疑問）〉を下位に位置づけ、モダリティ体系全体の記述に成功し、琉球語のモダリティ研究の手本を示した。

(5) 従来の研究で「確認要求」と呼ばれていた文のうち、首里方言で「シェー」「シェーヤー」という文末形式（終助詞）で表される文は、〈叙述〉の文に分類し、さらに〈前提・注目・思い出させる〉文に下位分類した。

２．研究の目的

先述の首里方言の包括的なモダリティ研究の分析結果に基づき、他の琉球諸語にも応用可能なモダリティ調査票を作成するための基礎的な研究を実施することを目的として、平成 30 年から令和元年度にかけて下記の内容で研究を行った。

(1) 沖縄語に属する「宜野湾市宜野湾方言」、国頭語に属する「本部町山里方言」の２地点において実地調査を行い、積極的に用例を収集した。

(2) 名詞述語・形容詞述語・動詞述語文のモダリティ体系を明らかにするために、調査票を用いてそれぞれの文の用例を網羅的に収集した。

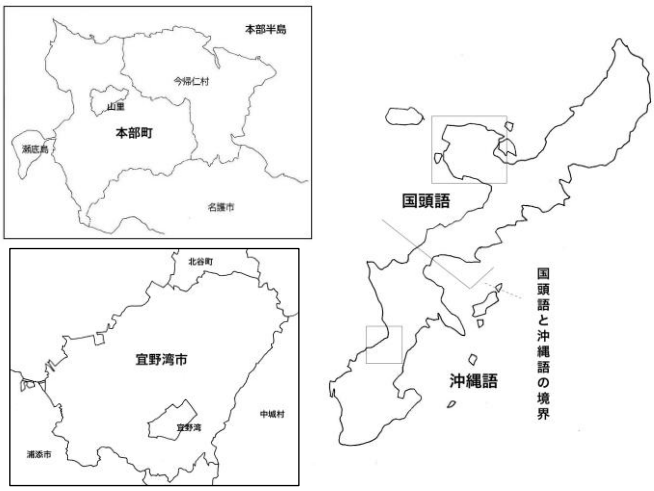

図１　国頭語山里方言と沖縄語宜野湾方言の位置

(3)形容詞のムード形式「表出法」、「確認要求」改め「前提・注目・思い出させる」文、「終助詞」を含んだ文に関しても用例を収集し、分析した。

(4) 収集したデータを文字に起こし、データベース化した。

(5) 調査の実績や成果に関して学会で報告・発表を行い、他の研究者に研究の問題点を提示した。

３．研究の方法

次の２つの方法により、対象言語・方言のインフォーマントと面接調査を行った。

(1) 作例調査：先行研究に基づいた調査票を作成し、質問・応答の形で調査を行った。

(2) 自然談話：調査票は用いず、自然談話をそのまま録音する形で調査を行った。

分析の方法は、収集したデータをすべて文字に起こし、データベース化した後、項目別に分類し、それぞれの文のモダリティを判定した。モダリティの判定方法は、文の人称・テンス・アスペクト・ムード・利益性・話し手と聞き手の間の情報共有の有無・話し手と聞き手の関係（年齢や性別等）などを抽出し、判定した。文末の形式（ムード）に関わらず、文全体の機能（モダリティ）を判定することを重視した。

４．研究成果

次の(1)～(6)の６点が明らかになった。尚、成果はモダリティに関する内容だけに留まらず、音声・音韻・形態論的な発見に関しても記述した。

(1)「表出法」に関して、九州方言の「赤か」ような明らかな形は見られないと結論付けた。近い

形として「アカサヨー（赤いね！）」という形の他に、「アカサヌ（赤い！）」という〈驚き〉を含む形、「アカセーサー／アカサッサー」等の形が場面に応じて微妙なニュアンスを変えて用いられていた。

(2)「（文に対する聞き手の）既知・未知」および「前置き・働きかけ」という２つの観点から「前提・注目・思い出させる」の他に「気づかせる」という文を追加し、「前提＝既知・前置き」「注目＝未知・前置き」「思い出させる＝既知（ただし忘却）・働きかけ」「気づかせる＝未知（気づいていない）・働きかけ」のように分類した。

情報共有 / 機能	**既知**	**未知**
前置き	前提	注目
働きかけ	思い出させる	気づかせる

表１　前提・注目・思い出させる・気づかせる文の分類方法

前提	昔よく湘南の海に行ったでしょう？あそこまた行きたいな。
注目	ほら、あそこに山があるでしょう？あそこが私の故郷ですよ。
思い出させる	（行けないと言われて）週末出かけようって言ったでしょう！忘れたの？＝思い出して
気づかせる	こんな夜遅くに電話したら相手に失礼になるでしょう！＝送るな

表２　前提・注目・思い出させる・気づかせる文の用例（標準日本語）

(3)本部町山里方言において、長母音と短母音の音韻的区別はあるが、文環境によっては音声的に長母音が短く発音されることがある。例えば、「芋」を表す単語は「ウムー」がデフォルトだが、「オッカーガ　キノーヤ　**ウムー**　ワンカイ　コーティチェータシェーヤー。コンドー　ワンガ　オッカーカイ　**ウム**　コーティチャンロー（お母さんが昨日は芋を私に買って来てあったでしょう。今度は私がお母さんに芋を買って来たよ）。」のようにあらわれる。

(4)本部町山里方言において、３モーラ語では、長音やはねる音はひとまとまりとして発音され、その音節内ではアクセントの境目が生じない。

(5)本部町山里方言において、語彙的な特徴は中央内陸部の方言群と類似し、音韻的な特徴は海岸部（都市部）の方言群と類似していて、両方言群の特徴を併せ持った方言である。

(6)本部町山里方言において、文末形式よりも条件形や中止形に特徴的な形がよりみられた。

＜引用文献＞

① 崎原　正志、琉球語沖縄首里方言のモダリティ：叙述・実行・質問のモダリティを中心に、博士論文、2017

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 崎原正志	４．巻 4
２．論文標題 本部町山里方言についてー琉球語学の見地からー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 やんばる学研究会会誌	６．最初と最後の頁 104～127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 崎原正志
２．発表標題 琉球語沖縄首里方言のムード・モダリティ－ムード・モダリティ調査票作成のために－
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 崎原正志
２．発表標題 前提・思い出させる・注目の文について－沖縄首里方言の例を中心に－
３．学会等名 沖縄言語研究センター総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 崎原正志
２．発表標題 ネオ沖縄語の普及とシマクトゥバの消失
３．学会等名 韓国言語文化教育学会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 崎原正志
２．発表標題 「名詞＋する」日沖対照研究ー首里・那覇方言を中心にー
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 崎原正志
２．発表標題 沖縄県本部町ヤビクバル方言の記述文法および本部町諸方言研究の必要性について
３．学会等名 沖縄言語研究センター定例研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考